

言語権の重要性を考察するための題材

—多文化クラスにおける試み—

山田 悦子(北海道大学)

1. 多文化クラス(国際共修型クラス)

本発表では、日本の大学院修士課程における異文化間コミュニケーションの専門科目で、言語権や言語所有(権)(Language Ownership)に関連して、自身、他者の言語への尊重の意識を考察する3つの題材について、学生の考察を含めた見解を提示する。言語権を「道具としての言語権(instrumental language rights)」と、「文化やアイデンティティにつながるシンボリックな言語権(non-instrumental language rights)」から考察し、討論につなげやすいような題材を探した。当実践を行った授業は、英語による多文化クラスの形態で、交換留学生と日本語母語話者(大学院修士課程生)によって、多様な知識や多角的な視点が持ち込まれることを期待した。

2. 『最後の授業(アルフォンス・ドーデ著)』を日本の国語教育で導入した意義

第二次世界大戦前と戦後の一定の時期に、日本の国語教育の中で当作品を扱った意義について、また日常的に多言語環境ではない地域で、どのように自身、他者の言語への尊重の意識を教育に含めるかを考察の対象とした。当作家からは、自身の言語、他の言語を共に尊重すること、ナショナリズムなど、汎用性のあるメッセージが明確に伝わり、短編でもあることから、「世界中のどの地域でも教材として適しているであろう」、また、「アイヌ語や琉球諸語など、日本の中の危機状況にある少数言語について、並行して教えるべきである」という見解が多く出た。「当該地域の領有権を巡る争いの歴史を詳細に教えなければ、小説のメッセージがうまく伝わらないのではないか」、「英語のような有力言語の実用性に傾倒した言語教育は、非多言語環境の地域ほど、警戒する必要があるのではないか、よって年少期から様々な他言語について知る機会を導入する必要があるのではないか」などの見解が示された。

3. 「勝ち組・負け組抗争」

第二次世界大戦終結後のブラジル日系社会において、日本の勝利を信じ続けた「勝ち組」と、日本の敗戦を事実として受け止めた「負け組」に分裂し、殺人事件まで起きた抗争を題材とした。当時の日系社会は、移民一世と二世の世代が大半で、日系コミュニティ内で日本語を媒介語とした生活が成り立っていた。主に二世の世代が、現地のポルトガル語による学校教育を受けており、現地メディアから日本の戦況についての真実の情報を入手し、「認識運動」を行った。しかし、主に日本語のみに頼っていた層を中心とする「勝ち組」は、現地情報へのアクセスに欠いていたことのみならず、根強い戦前の軍国主義による教育から脱却できなかったために、日本の負けを認める「負け組」への憎悪を募らせて、抗争に発展した。言語権の、特に道具としての言語権を欠くことにより起きうる事例で、情報通信の進化した現代社会で類似の事例が起きる可能性を検討した。「できれば2、3の言語に通じていることが望ましい」、「メディアやインターネットの情報、AI を過信することも、根源は同じである」、「言語の統制によって、閉鎖的空間は、簡単に作られる」などの、現代にも通じる見解が見られた。

4. 世界の「言語による支配 (Linguistic Dominance)の事例研究」

世界にある「言語による支配」や「強制」が行われた事例を自由に探し、その概要と影響について各学生が分析する課題とした。戦争や紛争によるものや、植民地化によるもの、少数言語の問題などが典型的であるが、表向きには言語が強制されていることが見えにくい事例もある。2020年度より2023年度までの4クラスで、計17の世界各地の事例が出された。必ずしも自身の出身地の事例を選ぶ必要はなく、また、留学生、日本の学生の別を問わず、「アイヌ言語」の事例を選ぶ学生が、最も多かった。言語による支配は、ネガティブな印象のほうが強いと思われるが、多言語地域で言語の強制により、共通語の設定が達成された例や、英語が第二言語として通用する状況が生み出された例など、被支配地域に利益をもたらした側面を指摘する分析につながっている事例も何件かあった。

5. 題材の選択についての省察

当初、留学生と日本語母語話者学生で、見解に大きく違いが出るのではないかと予測していたが、それに反し、両者の傾向に大きな違いは見られなかった。留学生は学部の高年次生、日本語母語話者学生は大学院生で、抽象思考やクリティカルシンキングの展開に大きな支障はなかったことも一因と考えられる。題材は概ね、議論を展開する題材としての機能を果たし得ると考えられる。ただ、4.の「言語による支配」の課題で、政治的に敵対関係のある2つの地域出身の留学生の議論展開が微妙になった瞬間があった。

履習者数も少数のため、学生の振り返りや課題の記述の抜粋を紹介する形式での実践報告とする。他の形態の授業であっても、参考になれば、また、他の題材の可能性についても知ることが出来れば幸いである。